優秀作　吉田美華子さん

私の初めて大阪適応記　　文：パク・ゴウン

私たち夫婦は大阪に住むことを決心し、2011 年 9 月、大阪に足を踏み入れた。

2011 年は日本で辛く悲しい出来事があったため、そんな時期に日本に行くということを家族全員が非常に心配した。もう永遠に会えないかのように泣いていたが、私たちは心配を後にしたまま旅立ち、そしてすぐに日常を取り戻した。

その後、この地で知人の紹介によりとても親切な大家さんを紹介してもらい、大阪の南部に住まいを決め、定住のはじめの一歩を踏み出した。

エピソード 1

大家さんが、郵便物がちゃんと届くように表札を掛けたらどうかと言うので、私たちは手作りの表札を掛けた。

ある日、夫と買い物に行って家に帰る途中、二人のおばあさんが私たちの家の前に立って話をしているのを聞いてしまった。

「ここ、朝鮮人が住んでるね」と言う…。

そして私たちは大家さんに事情を話して、表札を外してしまった。

おばあさんたちの時間はどの辺りで止まっているのかしら？

エピソード 2

運良くある会社に就職することができた。

日本に留学していた時、飲食店での接客アルバイトしか経験のなかった私にとって、事務所で椅子に座り電話注文を受け、あれこれ処理する仕事は簡単なことではなかった。

受話器の向こうから聞こえてくる単語を聞き逃さないよう頭をフル回転させて、毎日私は目のくまがあごの下までかかってきそうなくらい大変な状況だった。

ある時などは、コテコテの大阪弁のおじさんがいきなり「これなんぼや？」と言ってきたのだ。

日本語を本で学んだ私に大阪弁がわかるはずがない…。いままで見たことも聞いたこともない「なんぼや」は一体何なのか。3 秒間の沈黙ののち、私はおじさんに聞き返した。

「なんぼやって何ですか？」

エピソード 3

一人目の子供が生まれ、やっと子供を連れてひとりでも外出する勇気が出てきた頃、私はベビーカーを押して近所のスーパーへ向かった。スーパーの入り口にはマクドナルドがあり、フライドポテトの匂いがいつも鼻腔をくすぐった。

私は子供がぐっすり眠っていることを確認し、注文した商品を持って日当たりのいい近くの公園のベンチに腰を下ろした。ひとりだけの時間を満喫しながらフライドポテト

を一口食べようとしたその瞬間、誰かが話しかけてきた。突然背中から冷汗がでるようだった。

（なんなの、私の時間を邪魔するあなた誰！？）顔をあげてみると、にこにこスマイルのセールスマンだった。

（ああ、そうね…。笑う顔に矢立たずだわ…。）

「に..ほ..おん..ご..わ..か..り..ま..せ..ん…。」と、どもりながらやっと口を開く演技をした。

セールスマンは戸惑いながら悪かったと謝り、ほかのターゲットを探しに慌てて立ち去った。

（フゥ～。私の演技、なかなかだったわ。）ごめんなさい、おじさん、フフ…。

私の大阪生活は今年で 15 年目。いまだに適応中だが、明日がワクワクする楽しい今日を暮らしながら、いつもこのすべてのことに感謝の気持ちを忘れないことを私自身と約束する。